

Title	万治頃の小説制作事情 : 謡曲を題材とする草子群をめぐって
Author(s)	川崎, 剛志
Citation	語文. 1988, 51, p. 9-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68784
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

万治頃の小説制作事情

——謡曲を題材とする草子群をめぐって——

川崎剛志

出版業者が企画を立て、新たな文芸作品を世に送り出してゆく。

——現代にまで通ずるこうした営為が本格化するのには、およそ明暦・万治の頃よりと考えられている。^(注1)では、この時期に当たって、刊行予定の草子の原稿を執筆するという行為及び活動は、出版業者らの行なう事業とどのような関係をつつ成り立っていたのであろうか。本稿では、具体的に二、三の作品を取り上げ考察を行ない、その結果をもとに、当時の一般的な小説制作事情を導いてゆきたいと考えている。

なお行論の性格上、文献の引用が多量に及ぶため、引用に際しては原本の仮名に適宜漢字を宛て、振り仮名は省略した。また句点は原本のまま残し、読点のみ私に附した。

二

万治三年十月、京のみしや瀬兵衛より、「道成寺物語」なる草子が刊行されている。道成寺縁起譚、謡曲「道成寺」という二つの著

名な物語世界を取り合わせた体の小説である。初板と目される慶応義塾大学図書館蔵本は三冊組の絵入半紙本である。

『道成寺物語』は予め三冊組の草子として刊行することを前提として執筆されたものらしく、その冊数に合わせて、実に整然とした構成がなされている。

〈表1〉

(h) 『道成寺物語』 〈評論(1)〉 安珍鞍馬寺を発ち、紀伊国牟婁郡に到る (仲) 道成寺縁起譚前半部の世界 〈評論(2)〉 (n) 謡曲「道成寺」の世界 道成寺縁起譚後半部の世界 〈評論(3)〉	謡曲「道成寺」 ○ (昔物語)	『謡抄』 ○ (○)
--	--------------------	---------------

周知の如く、道成寺縁起譚は、愛執のため蛇と化した女が道成寺の

鐘もろともに恋慕の相手を焼き殺す事件を説く前半部と、その男女が法華經の功力により成仏したことを伝える後半部とから成っている。一方、謡曲「道成寺」はその縁起譚前半部を本説とし、未だ成仏していない女をシテとして登場させる。そのため縁起譚の世界を記し了えた後に謡曲の世界に移行するというわけにもゆかず、右の如き筋が案出されたのである。

〈表I〉下段には、物語を叙述する際に利用されたと考えられる主な資料を示しておいた。うち「謡抄」は我国最初の本格的な謡曲注釈書で、近世初期のベストセラーの一つであった。謡曲「道成寺」に相当する部分についてはともかくとして、縁起譚に相当する部分の叙述とその典拠との関係については、詳しく述べておく必要があろう。

道成寺縁起譚を伝える著名な資料には、『大日本国法華経験記』、『今昔物語集』、『元亨釈書』、『道成寺縁起繪巻』、謡曲「道成寺」等があり、しかも各資料の間には少なからず内容の異なることが知られている。中でも主人公の男女の設定に関する異同は顕著な異同の一つで、本作の典拠を検索する上で有効な点となる。本作では、鞍馬寺の沙門安珍と、熊野詣での途紀伊国牟婁郡にて彼が一夜の宿を借りた家の女主人とが、事件の当事者とされている。前掲の資料のうちこの設定と一致するのは、『元亨釈書』巻第十九、靈柩、「安珍」の項の記載のみである。しかし両書的一致もその程度のもので、例えば『元亨釈書』に「與一比丘、詣熊野山」とあるのに対して、本作では本文にも挿絵にも、連れらしき者は現われてこない。そうした点までも含め本作の設定とよく一致するのが、『謡抄（道成寺）』の「熊野詣」の項の記載なのである。なお同項末尾

には「元亨釈書ノ十九ニ詳也」とあり、同項の執筆に際し『元亨釈書』が参照されたことを示唆している。本作を含め三書間の関係が端的に現われている部分を次に引く。熊野より下向の途、安珍が女を裏切り、去って行く件りである。

『道成寺物語』

かの宿の女房は。もはや下向の時分ぞと思ひ。種々の珍物調へて。門のほとりに立出つゝ。今や遅しと待ち居たり。然れども安珍は。かねてたばかりし事なれば。いかでか宿に止まるべき。かの門を忍び過ぎ。はや程遠くぞなりにける。

『元亨釈書』

（安珍）經、婦家、而不入、急奔過、主婦數、扃程、儲、供膳、傍、門、同路、過、期、不至（寛永元年刊本）

また縁起譚前半部に相当する部分に限っては、『謡抄』のはか、謡曲「道成寺」の住僧（ワキ）の昔物語——但し、奥州の山伏とまなこの莊司の息女との間に起こった事件とされる——が、もう一つの典拠として採られ、両者の叙述を折衷する形で本文がまとめられている。次に一例を引く。女の化した蛇が安珍を焼き殺す件りである。

『道成寺物語』

やがて道成寺に走り入。こゝ

『謡抄』

彼地道成寺ニ入テ。方々ヲ尋

やかしこと尋ねれども。思ふ法師は見えざりけり。かゝりける処に。鐘樓を囲み置きたるを見付け。世に怪しげにまほりけるが。尾を以て堂を叩き破り。やがて竜頭を銜へて。七纏ひ纏ひ。瞋志の炎を出し。尾を以て叩けば。忽ち釣鐘より火焰出て。其鐘の熱き事辺りにもおり難し。

廻リテ。堂ヲ囲タルヲ見付テ、尾ニテ堂ヲ叩キ破テ、鐘ヲ纏ヒテ叩ケバ、火焰出テ、其鐘熱クノ。側ヘ寄ラレザル也。謡曲「道成寺」

この寺に來り、ここかしこを尋ね歩きしが、鐘の下りたる処を不審に思ひ、竜頭を銜へ、七纏ひ纏ひ、尾にて叩けば、鐘は即ち湯となり、山伏も即座に失せぬ。(日本古典文学全集「謡曲集二」(底本一擬車屋本))

なお細部の表現や挿絵に注目すると、『道成寺縁起絵巻』等も一部参照されていたのではないかと思われるふしもあるが、確証はない。

また本作には、数多くの挿話が載せられている。今、出典を明らかにし得た事例を紹介しておく、まず中冊の女主人が安珍を誘惑する場面に、「清きも濁る習あり」として『沙石集』所収の二話が簡略化して引かれている。巻第四「上人子持タル事」の鳩摩羅炎三藏の話と、巻第七「無嫉妬ノ心二人ノ事」の朝日の阿闍梨の話である(日本古典文学大系『沙石集』(底本一梵舞本)に拠る)。また下冊の白拍子(謡曲「道成寺」前シテ)の舞の詞章の中には、「謡抄(春日竜神)」の「スハ八大竜王ヨ」の項の記載が一項残らず引かれている。

そうした中でも上冊はさらに、物語の進展に直接関与しない種類の記事ばかりが集められているという点で、異彩を放っている。すなわち、安珍が鞍馬寺を落ち紀伊国牟婁郡に到るまでの道行文、所々の案内記事、及びいくつかの挿話により、ほぼ一冊が出来上っているのである。

近世を通じて根強い人気を誇った刊行物の一種に、名所記・地誌がある。そのブームのきっかけとなった中川喜雲著「京童」が刊行されたのは、明暦四年七月のことである。そしてその約二年後に本作は刊行されている。とすると当然、「京童」の人気が本作上冊の内容に何らの影響を及ぼしたものと想像されるのであるが、事実、上冊の挿絵には「京童」挿絵中の図柄を流用した例がいくつも認められ、「京童」の人気の跡を追う形でこうした叙述がなされたことを、裏付けている。一例を引く。安珍が鞍馬寺を発つ場面の図である。(図I)参照)

そしてここでもう一つ注目すべきは、読者の嗜好する記事をまとめて掲載するための器として、一冊の本が能動的に利用されている点である。大いに注目し、記憶に止めておくべき事例である。

△表IⅤにも記しておいたように、本作の冒頭と末尾、及び縁起譚前半部終結後の中冊末尾には、作者の評論らしきものが添えられ、本作の整然とした体裁を一層際立たせている。そしてその評論もまた、本作中の他の部分同様、作者の机辺に備えられていたのであろう手近な資料を利用して記されたものであった。

まず上冊冒頭の評論(1)は、「可笑記」巻第一、第二十一段めの記載より剽窃されたものである。如偏子著「可笑記」(寛永十九年刊)

〔図I〕『道成寺物語』第一図



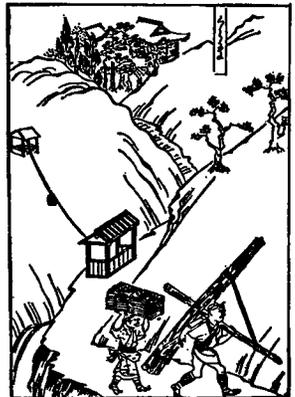
嵯峨の
釈迦堂



大原



鞍馬



〔京童〕

は長い間多くの人々に親しまれた書物で、本作刊行當時も、万治二年正月に絵入本が刊行され、翌三年二月には浅井了意の手になる同書の批評書『可笑記評判』が刊行されるといった状況であった。

『道成寺物語』

夫れ淫欲の道ほど恐ろしき物はあらじ。春の駒体を破り。

夏の虫身を焦す。

されば女の髪筋を縫れる綱には。大象もよく繋がれ。女の履ける足駄にて作れる笛には。秋の鹿多く寄るとぞ言ひ伝へ侍る。

一角といひし仙人は。内海外海の竜神共を捕へて。岩の中に押し込めしほどの人なれども。扇陀女といへる美人に身を寄せて。通力を失ひ。志賀寺の上人は、道心堅固の聖なれども。京極の御息所に恋慕して。御手の契りにうき名を流し。

花山の法王は。十善の御位を振り捨てて。御遁世ありしたにも。乳母の中務といふ女房に墮ちさせ給ひき。此外女の

『可笑記』

昔人の言へるは、されば淫欲の道ほど恐ろしき物はなし、春の駒体を破り、夏の虫身を焦す、山瀬といふけた物は、女の気を喰きて命を省みず

↑
『徒然草』第九段の一節

又一角といへる通力自在の仙人さへ、女に心を寄せ、通力自在を失へり

志賀寺の上人は、さばかりの尊き行者にておはしけれども、宇多の后に恋慕して、御手の契りにうき名を流し

花山の法王、十善の御位を振り捨て、御遁世ありしたに、乳母の中務といへる女房に落給ひにき、此外知恵才覚と呼

為に世を失ひ。命を亡ぼせし人々。古へ今までその例多き中に。殊に執着深く。恐ろしく覚え侍りしは。

次に中冊末尾の評論(2)は、『沙石集』巻第七「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」より剽窃されたものである。『沙石集』は写本・刊本両様の形で広く流布していたことが知られている。今、本作の依拠した本文の系統を厳密に位置付けるだけの準備はないが、ただ刊本に拠っていないことは確実である。『沙石集』該当項は一説話と評論という形をとっており、本作にも、説話と評論(一部)とが載せられている。次に引くのはその評論の部分である。

『道成寺物語』

誠に執着愛念ほど。恐るべき物は待らず。生死流転の已み難きも。たゞ此愛欲のなす業なりと。恐ろしかりし事どもなり。

そして下冊末尾の評論(3)は、『謡曲(通盛)』の「如我昔所願、今者已満足、化一切衆生、皆令人仏道」の項の記載より剽窃されたものである。次にその始めの部分を少し引いておく。

『道成寺物語』

此文の心は。釈迦仏昔よりの御願。今法華経を説き給ふ時。

はるゝ賢き人、鬼神と言はるゝ武き人も皆、女に誑かされし例多し(以上、同段全文。寛永十九年刊本。但し万治二年刊本には傍線部の語句なし)

『沙石集』

執着愛念ホドニ恐ルベキ事ナシ。生死ノ苦ノ久ク、流転ノ已ミ難キ、只此愛欲ノ致ス所ナリ。(中略)可恐々々。

『謡抄』

意ハ。釈尊昔ヨリノ御願。今法華ヲ説給フ時。満足シ給フ

満足し給ふといふ事なり。其子細は。余経の力にては。善人は得道すれども。悪人は仏にならず。(以下略)

ト云事也。其子細ハ。法華ヨリ外ノ經ニテハ。善人ハ得道スルヤウナレドモ悪人ハ。曾テ仏ニナラズ。(以下略)

以上、本作の作法を吟味するに、この作者の行なっていたのは、多くの購読者を獲得し得るような内容の原稿を、刊行予定の草子の冊数に応じて手早く書き上げる作業であつたと、理解されるのである。

三

『道成寺物語』刊行の五か月前、万治三年五月には、『百万物語』なる草子が刊行されている。これもまた謡曲に取材した小説である。赤木文庫蔵の二冊組の絵入大本が唯一の現存本であるが、同本は刊記より板元名の削り取られた後印本である。なお先学の御論考に、橋本直紀氏「謡曲草子化の一典型——『百万』と『百万物語』の場合——」(『国文学入関西大学』第58号、昭和56年)があり、概括的な論究は同論考により尽くされている。

『百万物語』の冒頭には、次の如き序が掲げられている。

夫れ諸仏菩薩の御慈悲は。平等にして普しと雖も。殊に勝れて有難きは。忝くも三界の教主釈迦如来。衆生を深く憐み給ひて。或ひは神と迹を垂れ。又は親となり子と生まれ。色／＼の方便を以て。衆生に縁を結び給ひ。終に仏果に至らしめ給ふ。

謡曲「百万」の主題を幾分推し上げた体のものである。そしてこの序の記述と連繫する形で、物語の方もその首尾が整えられている。

生き別れになっていた百万母子が、嵯峨野の寺(清涼寺)の大念仏に行き合わせ、再会を遂げる、というのが謡曲「百万」の首尾である。それに対して『百万物語』の方は、奈良に住んでいた百万の家庭が崩壊してゆくところから叙べ始められる。それより大念仏の場に到るまでの経緯については、謡曲「百万」の登場人物らの語るところもあり、本作の叙述も一応それに基づいているのであるが、中には、同趣の女物狂の謡曲「三井寺」の内容の一部を援用して記された件りも見受けられる。すなわち、百万の夫の死に次いで、出奔した一子藤若(「百万」にこの名なし。「三井寺」では千満)が西大寺の住僧(同、三井寺の住僧)と師弟の契りをなす件りが記され、その後、橋本氏の御指摘の如く、百万(同、千満の母)が春日社(同、三井寺)に参籠し、「本地大聖釈迦如来」たる明神(同、観世音)より、子に逢いたくは嵯峨野の寺(同、三井寺)に参るべしとの夢告を蒙る件りが記されているのである。前掲の序の傍線部(1)はこの春日明神のことを指す。

一方、物語の末尾には、序の傍線部(2)に相応する次の一件が書き添えられ、一篇が結ばれている。

去程に百万は。藤若丸を誘ひつゝ。嵯峨野の寺を立出て。奈良の故郷に帰りしが。夢のうき世を驚きて。翠の髪を剃り落とし。夫の菩提を弔ひけり。有難かりし事どもなり。

こうした首尾の整備とともに、謡曲「百万」と重なる大念仏の場では、場面の整理、筋の緊密化が図られている。そのうちここでは、母子再会の場面の高潮度を一段と高めるべく行なわれた一連の改変作業について、やや詳しく述べる。次に謡曲「百万」の構成を略述する。

(1) 百万の一人(子方)とその同伴者(ワキ)が登場する。

(2) 所の男(アイ)の唱える念仏に誘われ、狂女(シテ)が登場し、歌念仏などを披露する。

(3) 子は狂女が母百万であることに気づく。そしてその子の依頼により、同伴者が百万にことばをかける。但し、依頼に従い、子がそこに居ることは伏せられる。

(4) 百万は一人との再会を祈念し、本尊の釈迦像に法衆の舞を捧げらる。

(5) 同伴者が百万に一人のことを打ち明け、再会が遂げられる。

『百万物語』では、まず「百万」(3)の、子が母に気づく件りが抹消され、続いて百万にことばをかける者が、子の同伴者から不特定の参詣者にさし替えられている。すなわち、藤若は未だ母に気づかず、西大寺の住僧とともに参詣の群衆の中にいるという、「百万」とは別の状況がここに設定されたのである。やがてその状況は、百万が法衆の舞を舞い了えた直後、住僧が藤若の手を引き百万の面前に立ち現われるという形で、一息に打ち破られる。すぐさま住僧は百万に語りかけ、ことばを交わす。しかしここでもまた「百万」(5)に反し、次の如き藤若の姿が描き出され、高潮の度合が一層高められてるのである。

児は余りに耐えかねて。する／＼と走り寄り、狂女の袂に取り付きて、これこそ御身の尋ね給ふ。藤若丸にて候ぞや。あら懐かしの母御やと。袖を顔に押し当てて。さめ／＼とこそ泣きにけれ。

おおよそ本作の物語は、著名な謡曲「百万」から即かず離れずとあったところに設定されている。しかもその設定は、今述べたよう

な周到な再編作業に支えられている。つまりこれら一連の作業は作者の意図的な所為にほかならず、そこに読者の嗜好に関する分析と、それに基づく配慮のなされた跡を、窺うことができるのである。

本作の場合、「道成寺物語」ほど整然とした構成がとられているわけではないが、それでも上下冊の切れ目前後の叙述に注目すると、執筆に際し、刊行予定の草子の冊数が念頭に置かれていたことが確認される。その辺り、謡曲「百万」に拠り、ある参詣者「百万」では子の同伴者と百万との対話が記されているのであるが、上冊末尾近くになると典拠から離れ、百万が愁嘆する件り(上冊末尾)と、愁嘆から立ち直り、祈りへと向かう件り(下冊冒頭)とが設けられている。次にその件りを引く。謡曲「百万」の一詞章が重複して用いられている傍線部(1)と(1)の間が、該当箇所である。ちなみにこの部分を取り除くと、元の滞りのない対話を復元することができる。

春日の里を立出て。今此寺に参りつゝ。我子に逢はんと祈りつゝ。かやうに物に狂ふをば。おかしと人や思すらん。よし人は何とも。みるめをかりの世の中に。子故に迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず。あら我子恋しやな。かやうに心あり顔なれども。我は物に狂ふよなふ。いや我ながら理なり。あの鳥類や畜類だにも。親子の哀れは知るぞかし。ましてや人の親として。生まれしより片時も。身をば離れず育てつる。我子の行方を知り給はゞ。教へてたべや人／＼とて。そのまゝそこに平れ伏して。声も惜しまず泣き居たり。

△以上、上冊▽
△以下、下冊▽

去間百万は。涙を抑へて申やう。忝くも此御本尊も。羅睺為長

子と説き給へば。恐れながらも自らも。此御仏に頼みをかけ。我子に逢はんと祈るなり。

(謡曲詞章との対照には、日本古典文学全集「謡曲集」を用いた。うち「百万」は△底本—寛永卯月本。なお実線は一致、点線は類似を示す)

傍線部(ハ)は謡曲「清経」に、(イ)(ウ)は「三井寺」に拠る。(ニ)は常套句であるが「俊寛」にも見えている。また(ホ)は「百万」の詞章ながら、元はもう少し後方に位置していたものである。

元々謡曲「百万」の対話中に切れ目らしき所はなく、右の如き細工により、ここにわざわざ区切りが設けられているのである。したがって、この区切りの持つ意味は重く、おそらくは、二冊組の草子の叙述内容をどのように構成すべきかという一篇全体の構想と結びついたところで、設けられたものと推測されるのである。

ところで『道成寺物語』同様、本作にも挿話、物尽し、道行文等の記事が豊富に載せられている。このうち挿話について言うと、仏教関係の話題が圧倒的に多く、しかもそのほとんどが百万の口から語り出される仕組みになっている。例えば能「百万」の見せ場の一つであった歌念仏の場面を本作で見ると、百万が歌念仏に続けて麴成仏の話を説き、さらには地獄のありさままで語り出す、といったふうに作られている。

同じく能「百万」の最高の見せ場であった法楽の舞の詞章(二段グセ)も、次表の如く増補されている。但しこちらの方の規模は破格で、下冊の本文八丁半のうち約七丁分をこの舞の詞章が占めている。

△表Ⅱ▽

謡曲「百万」の舞	「百万物語」の舞
a 百万の身の上	
b 奈良から嵯峨野の寺に到るまで	………(舞の外—道行文)
の足取り	
c 寺から見た四方の景色	増補・整理 ↓(1)同上
a' 寺の本尊の由来	↓(2)同上
e' 安居の御法、その他	釈迦一代記(増補)

このうち、五丁半程度を占める釈迦一代記について詳しく述べる。本話は、謡曲「百万」に拠る(傍線部)次の文辞を承けて始まり、

(上略)責賤群衆する此寺の。仏ぞ殊勝なりける。忝くもかゝる身に。申は恐れなれども。二仏の中間、我等如きのあさましき。迷の闇を晴らさんとて。天竺震旦我朝。三國に渡り給ふ。

赤梅檀の尊容、毘首羯磨の作とかや。

釈迦一代の事跡について叙べた後、

其後、此梅檀の仏像。震旦より我朝に渡り給ふ。

と結ばれている。すなわち、嵯峨野の寺の本尊の由来を説くという形式で記されているのである。

さてその叙述内容について述べると、大方のところは、橋本氏の述べられた通り、「釈迦(の本地、筆者補)もしくはそれに類するものを用いて、言わば釈迦一代記のダイジェスト版の体」に作ったものようであるが、その中に一件、「謡抄(百万)」に拠り記された記事のあることが指摘できる。前掲の本話導入部にも採られている「毘首羯磨ガツクリシ赤梅檀ノ尊容」という詞章に対する注釈

の記載が出典で、その内容はおよそ次の如くである。——正覚を得た釈迦は、母摩耶夫人のため切利天に昇り、法を説く（安居の御法）。一方、地上に残された者たちは釈迦の不在を大いに嘆くが、その時、毘首羯磨なる天工が天降り、釈迦の像を造る。以上である。つまり、前述の如き形式と相応する形で、釈迦像の由来が書き込まれているのである。次にその始めと終わりの部分を引く。なお該当箇所の前後は、『宝物集』の二つの記事を以て整えられている。

『百万物語』

それよりかの石の上にして。座禪の功を積み給ひ。十二月八日の明星を見給ひて。諸法実相の理を悟り給ひてより。三界の導師。釈迦牟尼仏と成り給ふ。

其後本国摩迦陀国。父の御許に帰らせ給ひ。淨飯王の為に。観仏三昧。経を説き給ふ。其説法の時。御母摩耶夫人の為に。切利天に昇り。説法せんと思召たり。

（中略）

これによつて、優填王と申せしは。赤梅檀を以て。仏像を造らんとし給ふに。毘首羯磨

と云。天人の大王降りて。仏の御かたちを造りて。

国王大臣拜み給ふ。扱一夏九十日過ぎて。仏天竺へ帰り給ふ時。造れる所の梅檀の仏。金銀水精の階の許まで。御迎ひに参り給ひたりければ。釈尊の給はく。我は八十年の化縁尽きて。涅槃に入るべきなり。梅檀の仏は。末代の衆生を。利益し給ふべきなりとて。御先に立て、帰り給ふ。

また「謡抄」『宝物集』の両書は、本作の他の部分にも用いられており、この一代記が後補によるものでないことを裏付けている。まず「謡抄」の利用例を一つ引いておく。再会を遂げた際の百万のことばである。

『百万物語』

情物を案するに。一切衆王皆是吾子と。御経に説き給へば。釈尊は本よりも。衆生の為の父なれば。母諸共に廻り逢ふも。此御本尊の利生ぞと。歡喜の涙仰へ難し。

『謡抄（百万）』

云。天人ノ大王降テ。仏ノ御像ヲ作レリ。

『宝物集』

（優填王がその像を）拜み給ふに、一夏九十日果て、天竺へ帰り給ふ時、梅檀の仏、金銀水精の階の許まで、御迎ひに参り給ひたりければ、仏宜はく、我は八十年の化縁尽きて、涅槃に入へきなり、梅檀の仏は、末代の衆生を利益し給ふべきなりとて、御先に立て、帰り給ひき

謡曲「百万」

よくよく物を案するに、
かの御本尊は本よりも、衆生の為の父なれば、母諸共に廻り逢ふ、法の力ぞありがたき

法ノカゾ有ガタキ (上略) 法華ニモ釈迦ヲ、我亦為世夫ト説。

一切衆生皆是吾子トイヘル詞ヲ。踏マヘテイヘル語ノ後先ト見エタリ。

次に『宝物集』の利用例を一つ引いておく。百万が地獄のありさまを語る件りであるが、次に引くのはそのうちのごく一部である。

『百万物語』

天に仰げば劍の林眼を破る。

地に俯けば猛火燃え出て口に

入る。泣かんとすれど涙落ち

ず、叫ばんとすれども声出ず。

須臾刹那の程も。心を休むる

暇なし。

『宝物集』

天に仰げば劍の林葉落ちて眼

を破る、地に俯けば猛火燃え

出て口に入、泣かんとすれと

泪落ちず、叫ばんとすれとも

声出ず、須臾刹那の程も、心

を休むる暇なし

以上の点から、この釈迦一代記は、『百万物語』の下冊に法案の舞の詞章として載せるべく、新たに編み直されたものと判断して、まず間違いない。また今ある上・下冊の構成が、一篇全体の構想に基づくものであることについては、前に述べた通りである。とする、この種の挿話の記事を扱う際はしばしば説かれる、量の水増しといった帳尻合わせ的な作業をここに想定することは難しく、それどころか反対に、『道成寺物語』上冊を作り出したのと同種の能動的作業がここでも行なわれていたと見るのが、妥当な見方であると考えられる。すなわち、下冊という一冊の本のために、百万の物語とは別に、もう一つ魅力ある物語が用意されたというわけである。釈迦の物語が当時の読者にとってもなお魅力的な対象であったことについては、改めて述べるまでもあるまい。

四

万治期を中心に、謡曲を題材とする草子数篇が複数の板元より次々と刊行される、という現象が起こっている。前に取り上げた二篇も、この現象の内に属するものである。京板が現存し、初板の刊行時期をほぼ確定することのできる作品が、前二篇を含めて四篇、

万治二年十二月 『松風村雨』二冊(尾崎七良右衛門板)

万治三年五月 『百万物語』二冊(板元不詳)

同年 七月 『小町歌あらそひ』二冊(野田弥兵衛板)

同年 十月 『道成寺物語』三冊(ひしや瀬兵衛板)

そのほか、寛文頃刊の江戸板が現存するのみながら、京板の書籍目録の記載により、江戸板に先行する京板が刊行されていたものと推定される作品に、『熊野物語』『花子ものぐるひ』『恋の舟橋』等がある。各篇の書籍目録所載状況は次の如くである。

●『和書籍目録』(寛文六年頃刊)に初出——『松風村雨』『熊野物語』

●『増書籍目録』(寛文十年刊)に初出——『百万物語』『小町歌あらそひ』『道成寺物語』『花子ものぐるひ』『恋の舟橋』

但し『和書籍目録』には遺漏が多いため、その所載の有無により刊行時期の上限を定めることはできない。

小規模ながら一つの流行現象のあったことが確認され、おそらくは、これらの草子の刊行をめぐって複数の板元の間で、先行作の跡を追うという行為が続けざまに行なわれたものと、想像されるのである。そしてその一証を『花子ものぐるひ』の中に見ることがができる。

「花子ものぐるひ」は謡曲「班女」を題材として著わされた小説である。まず謡曲「班女」の構成を略述する。

△前場▽

(1)美濃国野上宿の長者(アイ)が、遊女班女と吉田少将との恋の一件と、別離後の班女の様子についてしゃべり、班女に追放を言い渡す。

(2)班女(シテ)が野上を発ち、京に向かう。

△後場▽

(1)吉田少将(ワキ)と従者(ワキ連)が、白河より野上を経て帰京。糺の森に行く。

(2)狂女と化した班女が糺の森に現われる。

(3)従者が班女にことばをかける。

(4)班女は愁嘆し、舞を舞う。

(5)吉田少将と班女とが再会を遂げる。

これに対して「花子ものぐるひ」では、物語としての首尾、体裁を整えるべく、二つの事柄が書き足されている。一つは吉田少将と班女との恋の一件である。もう一つは前場(2)で退いてより後場(2)に現れるまでの班女の足取りについてで、ちょうど「百万」の中入に相当する箇所、次の三つの件りが設けられている。

(1)班女が上京する(道行文)。

(2)京市中にて京童とことばを交わし、京の名所の名を連ねた舞を舞う。

(3)糺の里にて里人とことばを交わし、謡曲「花筐」の物語を語る。このうち(1)(2)は、いずれも後場(3)―(4)の如き謡曲の定型を踏襲し

て作られたものである。舞や語りの形式を借りて挿話を積極的に掲載してゆこうとするこの姿勢は、既述の『道成寺物語』『百万物語』にも認められたところであるが、中でも本作と『百万物語』の関係はより深く、その類似は文辞の面にまで及ぶ。次にその例を二つ引く。まず(1)のうち、京童が班女に問いかける件りである。

「花子ものぐるひ」

「百万物語」

狂ひ廻りける程に。京童は集まりて。こは珍しき物狂かな。

さも面白く狂ひければ。参詣の貴賤群衆。これは不思議の

見れば容顔いつくしく。姿形も尋常なるか。何とて心乱るらん。いたはしさよとぞ申ける。

狂女答へて申やう。さればこそよ都人。これは和州奈良の里に。百万と申ものなるが。

班女此由聞くよりも。さればこそよ都人。わらはゝ憂き目に逢坂の。関の東の者なるが。(以下、身の上を語る)

狂女答へて申やう。さればこそよ都人。これは和州奈良の里に。百万と申ものなるが。(以下、身の上を語る)

謡曲「百万」

ワキ いかにかこれなる狂女、おことの国里はいづくの者ぞ。

シテ これは奈良の都に百万と申す者にて候。

ワキ それは何故狂人とはなりたるぞ。

シテ 夫には死して別れ、ただ一人ある忘れ形見のみどり子に生

きて離れて候ふほどに、思ひが乱れて候。

次も同じく(1)より。別の京童がまた班女にことばをかけてくる。そのことばに乗せられて班女が舞を舞わんと言う件りである。そしてここでは舞の詞章までも、京の名所の名を連ねた同趣のものとなっ

ている。

『花子ものぐるひ』

班女いよ／＼心浮かれて。持
ちたる扇を差し翳し。嬉し
人の言ひ事や。恋しき君を都
辺の。名所／＼を言の葉に連
ねて舞を舞ふべしと。

(舞—京市中からの眺望)

謡曲『百万』

シテ うれしき人の言葉かな、それにつきても身を砕き、法楽の
舞を舞ふべきなり。唯して賜へや人々よ。

両例とも、『百万物語』の文辞や舞(第三節へ表Ⅱ参照)が謡曲
『百万』に依拠しているのに対して、『花子ものぐるひ』の方は、
謡曲『班女』の中に依拠したと考えられる箇所を見出すことができ
ない。よって、『花子ものぐるひ』の右の件りは、直接『百万物語』
に拠って記されたものと判断されるのである。

また『謡抄(班女)』の利用事実も、そうした関係を裏付ける傍
証となる。班女について説明を行なった件りがそれに当る。次に
その一部を引く。

『花子ものぐるひ』

(班女は) 又は我身を扇に譬
へて。恨の歌を作るとかや。
夫れ扇は。寵愛を得る時は。
君の懐に抱かれ。袖の内に出
入すると雖も。秋風そよと吹

『百万物語』

狂女此由聞くよりも。嬉しき
人のことばかな。それにつけ
ても、身を砕き。法楽の舞を舞
ふべきなり。唯してたべや人
／＼とて。扇を翳し声をあげ。
(舞—清涼寺からの眺望)

(舞—清涼寺からの眺望)

シテ うれしき人の言葉かな、それにつきても身を砕き、法楽の
舞を舞ふべきなり。唯して賜へや人々よ。

両例とも、『百万物語』の文辞や舞(第三節へ表Ⅱ参照)が謡曲
『百万』に依拠しているのに対して、『花子ものぐるひ』の方は、
謡曲『班女』の中に依拠したと考えられる箇所を見出すことができ
ない。よって、『花子ものぐるひ』の右の件りは、直接『百万物語』
に拠って記されたものと判断されるのである。

また『謡抄(班女)』の利用事実も、そうした関係を裏付ける傍
証となる。班女について説明を行なった件りがそれに当る。次に
その一部を引く。

『謡抄』

(班女ハ) 我身ヲ扇ニ譬ヘテ。
怨歌行ヲ作テ。成帝ヲ恨申タ
ルコト有。夫レ扇ハ、寵愛ヲ
得ル時ハ。君ノ懐ニ抱カレ。
袖ノ間ニ出入スルト雖モ、秋

立てば。箱の中に投げ棄てら
れて。人を用ひらるゝ事なし。

風吹バ。箱ノ中ナドニ。投ケ
棄テラレテ。イラヌ物ニナル
ナリ。コレヲ我身ニ譬ヘタリ。

これを我身に譬へたり。
二篇の作者が同一人物であったか否かにより、多少事情は異なっ
てくるものの、いずれにせよ、新刊の草子を手元に置き、それを参
照しつつ次作の執筆に励む作者の姿を、ここに認めることができる
のである。

従来、『花子ものぐるひ』は『角田川物語』(明暦二年十一月刊)

の姉妹篇(前篇)であるとされてきた。しかし前述の如き『百万物
語』(万治三年五月刊)との関係からして、この二篇の成立をめぐ
って、完結した一篇の作品を分割した結果二篇が生じたとか、同一
者の手により一連の作品として二篇が制作されたとかいう経緯を想
定することは、不可能に近く、少なくとも草子の制作というレベル
においては、二篇は個別に制作されたと見るのが妥当である。

また作法の面でも二篇の相違は甚しい。まず筋立ての面について
言うと、本作の筋が前述の如く、謡曲の内容をそのまま敷衍した体
のものであるのに対して、『角田川物語』の方には、謡曲の内容を
その一部に抱え込む形の、より複雑で壮大な物語の筋が仕組まれて
いる。次に手法の面でも、例えば古典作品の文辞を頻繁に援用する
手口が本作にのみ認められるなど、両者の不一致は歴然としている。

それにもかかわらず、本作冒頭近くと末尾部分に限っては、
『角田川物語』独自の内容と交渉を持つ叙述が見えている。まず冒
頭近くに、

『花子ものぐるひ』

(冒頭部略) 堀川の院の御宇 〃〃に。本朝七十三世。堀川

『角田川物語』

かとよ。都北白河のほとりに。○□□□字かとよ。都北白河には。吉田の少将これさだと申。公卿一人おはします。

謡曲「班女」 都、吉田の少将
謡曲「隅田川」 都北白河、吉田の某

とあり、そして末尾部分には次の如くある。

公達二人出き給ふ。兄は梅若丸。弟を松若丸とぞ申ける。富貴万福と栄へつ。尽きせぬ宿こそ目出度けれ

謡曲「隅田川」 梅若丸、
「角田川物語」 梅若丸、松若丸

伝承や「角田川物語」等の影響により、本作刊行時には既に、謡曲「班女」の世界と「隅田川」の世界とを連続したものと見る見方が、かなり広くに受け容れられていたようである。本作はそうした状況に乗じて企画されたものであり、これこそかの『角田川物語』の前篇だと言い張るが如き右の記事に、作者の商魂の逞しさを感ぜずにはおられない。

以上の如く本作は、先行作の跡追に執心する作者の姿を見て取るには、格好の資料だと言うことができる。そしてこうした事例を見るに、やはりこれらの草子の作者には、出版業者あるいはその事業に精通した協力者らを想定しておくのが、妥当だと考えられる。

浜田啓介氏は「本朝女鑑の虚構」(『国語国文』第55巻、第7・8号、昭和61年)の中で、この草子群に注目され、「そもそも、「出版のための謡曲の読物化」を進め、或は直接その作品を作ったのは、草子屋であったろう。そうして彼等は、「出版のため」にする以前

に、「写本のため」に謡曲の読物化を既に行なってきた、と私に見る。謡曲をお伽草子にした作品が、写本の草子屋によって行なわれ、そのまま刊行されることもあり、草子屋自体も写本の本屋から刊行の本屋に移行し、造本の営為を移行させて行なったと考えるのである。」と述べておられる。首肯すべき御説である。

しかしながら、これまで私が述べてきたように、この草子群からは同時に、もう一つの重要な事実を読み取ることができる。それは板元らの行為の内実に関する事実である。すなわち、出自の問題はさて置き、あのように同趣の草子が続げさまに刊行せしめた彼らの行為の内実には、企画・作法いずれの面をとつても、既に草子屋的な仕事の側にはなく、出版業者個々の性格を帯びた仕事の側に確実に半歩から一、二歩踏み込んだところにあつたと、断言し得るのである。

五

はじめにも述べたように、万治頃の一一般的な小説制作事情を解明することが、本稿の目的であつた。そしてそのために『道成寺物語』『百万物語』を取り上げ、当時の典型的な小説作法を示してきた。これが典型と呼ぶにふさわしいものであることは、同時期に刊行された、謡曲種以外の草子の中にも、同工の作法が認められることにより証される。以下、その顕著な事例を三つほど紹介する。

まず『薄雲恋物語』二冊(万治二年正月刊)。これは、薄雲の前という名の室津の女が都の貴公子桜の宮に一目惚れし、末には想いを遂げるといふ内容の恋愛小説であるが、下冊の大部分を占めて長々と、『薄雲物語』風の艶書、ことばのやりとりが綴られている。

次に『竹斎』の追随作『竹斎狂歌物語』三冊（万治頃刊）。江戸でも不遇であった竹斎がその生活を清算し、帰京するという内容の小説である。本の冊数に合わせて整然とした構成がとられており、取り分け下冊では、『竹斎都へ上る事世道中紀行』なる題の下、一冊の本を残らず用いて、狂歌まじりの紀行が綴られている。

また同作の影響が指摘されている『是築物語』三冊（万治・寛文頃刊）。是築の主人、山本友名の恋愛事件を軸とする小説であり、これもまた本の冊数に合わせて整然とした構成がとられている。うち上冊の三分の二程度を占めて、「第五、友名湯治の事付道くたり狂歌」なる題の下、『竹斎狂歌物語』下冊と同趣の記事が綴られ、また中冊をほぼ残らず用いて、是築の語る楊貴妃、陶朱公の二話が載せられている。なお本作上冊には「京童」の影響のあることも指摘されている。^(注5)

右に紹介した事例は従来よりよく知られたものばかりであるが、第二、三節で述べた『道成寺物語』『百万物語』の作法と並べてみる時、これら万治頃に刊行された草子数篇の間に、ある程度共通した作法のあったことが認められる。その特徴をまとめると次の如くである。

- (1) 刊行物の売れ行き状況を眺め、読者の嗜好を分析しつつ、叙述内容を決定する。

- (2) 刊行予定の書物の形態（冊数）に合わせて、またはその形態を能動的に利用する形で、一篇の構想を立てる。

当時の草子が全て、こうした方法で作られていたというわけではない。しかし、程度の差こそあれ、この作法がかなり広い範囲において実践されていたことは、動かし難い事実であり、そしてそのこと

は取りも直さず、近世小説の制作現場において後々まで継承されてゆくことになる小説作法の基礎が、この万治前後の時期に確立されたことを、意味しているのである。

明暦・万治期を境として、出版業界を母体とする、これまでにない新しい型の文芸活動が立ち現われ、本格化してゆく。そうした流れの中、小説という分野にも新しい制作の場が現われ、出版事業の求める条件に適合した小説作りの仕事が本格的に始まったのである。

△注▽

- (1) 『日本文学新史・近世』第一章、啓蒙時代の詩と真実（渡辺守邦氏）参照。
- (2) このほか同趣の作に『藍染川』（刊年不詳）がある。但し同作の名は江戸板『新書籍目録』（延宝三年刊）、京板『改広益書籍目録』（貞享二年刊）まで見えず、本論の中で書名を挙げた作品よりやや遅れて刊行されたものと推測される。なお同名の絵巻とは無関係である。
- (3) 親世流では近世初期まで都の男が登場し、この役を担当していたようである。日本古典文学大系『謡曲集上』参照。
- (4) 藤井隆氏『未刊御伽草子集と研究四』、横山重氏、信多純一氏『説経正本集・第三』附録解題参照。
- (5) 注(4)のうち信多氏の解題参照。
- (6) 注(4)に同じ。
- (7) 菊池真一氏『是築物語』論（『国語と国文学』昭和55年8月号）
- (8) 前芝憲一氏『是築物語』の構造（『論究日本文学』第48号、昭和60年）

付 記

本稿は、昭和62年度日本近世文学会秋季大会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上、貴重な御意見を賜った諸先生に深く感謝申し上げます。
——大阪大学大学院博士後期課程——